

い  
ち  
じ  
く

てのひらを揺れたたせたる泉かな

梅雨の夜の目に入むや電機店の光

等閑のコーヒーに膜蓮育つ

アイスコーヒー氷を避けて下降の乳

夏にして槓静謐や三十才

猫じやらし若しや品川区の白雲

ホテルの床冷房に冷ゆ朝から

橘や網戸の声は友のもの

ととのへる茂みに妃そしりゐん

回 国 王 臣 麿 豆 の 花

小えびのわが身溶けそめくらげの中と知る

\*

左京区カートに西瓜四分の一カット

糸瓜棚荷物少なく傘はなく

秋出水いちじくの葉のたれこみて

なき人の声を知らざる糸瓜棚

露の玉年譜のはじめ疎なりけり

わが貌を映しパチンコ玉冷ゆる

僧 裕 福 猫 怠 慢 の 葵 かな

秋ながらサンダルなるよ浜辺に藻

御所の警備かつては弓や猫じやらし

芋の秋給油所に犬洗はれし

風の日は回転木馬に冷ゆる腿

いちじくをジャムに仕立てて瓶は煮沸

珊瑚樹多孔良夜の水のゆきかへる

かなしめば秋風冥利竹箒

柚子酢橘共に青しや笊の上

風吹いてふたたび櫛落葉かな

つづれさせ往復書簡竟を忌み

扉を開けて蜜漬樽様しるくバー

散蓮華冷たし炒飯一口目

たうがらし沈めて辣油卓の上

かへりみぬ櫛や櫛や冷えてゐん

\*

椎落葉宙に留めるすべはなし

水涸れて彼らはコハイモノ知ラズ

ボブスレーーひよいと飛び乗り身を収む

三人が傾きボブスレーー曲がる

自動車の暖房はじめ風のみと

悴む身自動販売機が照らす

或るひとの今は生前竜の玉

階段に厚く積む雪斜面なす

積む雪に雫や孔をなしにける

薄給やさざんくわ積める芝のうへ

枝の雪手紙不精は死になさい

風花はつとめてかたち見せざりき

空青く雲茜さす懐炉かな

洛中洛外 凶雲 黄金色 薬喰

鋤焼や花魁言葉ありんすをりんす

雪の友乳温めくれ焦がすまじ

終に寝ぬ蜜柑の皮のひとつつながり

霜柱報告少女耳あかき

細胞に細胞膜や去年今年

ヒートテックに身詰まる調布駅で待ち

駐車場青の籬に冬の感

コ  
ー  
ト  
扱  
る  
人  
が  
鏡  
の  
前  
に  
立  
つ